

支援機関紹介

鈴鹿医療科学大学薬学部



鈴鹿医療科学大学薬学部
学部長 川西 正祐 氏

2008年4月、待望されていた県内初の薬学部が鈴鹿医療科学大学に開設され、順調なスタートを切りました。キャンパスは鈴鹿市の白子にあり、昔のNTTの研修施設を利用した施設です。同大学の薬学教育の特徴、設備、開設後の状況と今後の展望について、薬学部の川西正祐学部長にお話を伺いました。

▶ 新設ながら将来性のある学生を確保

最初に第一期生の応募状況を伺いました。全国的な薬学部の新設で、応募者が減少する中で、鈴鹿医療科学大学薬学部には定員を充分満たす応募がありました。入学者の出身県は、三重県内が53.5%、愛知県が29.8%などです。当初、県内が7割と予想されたので、愛知県の高校の学生が多いこと、また男性の方が多いことが意外な結果でした。三重県南部の学生が14.9%ですので、もっと南からの学生が増えてほしいと期待しています。

▶ 医療薬学にふさわしい薬学教育を実施

同大学の薬学教育の特徴は、薬学教育6年制で求められる「医療薬学」にふさわしい教育を行っていることです。医療薬学では、薬学と医学との境界領域を特に教育し、医師と対等・協力的に医療に参加できる薬剤師を育てます。そのため、ほぼ全教員が薬学・医学博士で、少人数教育（5年後には1学年100名に教員約50名）を行います。同大学は医療系総合大学で、東洋医学、栄養学、介護福祉学の習得ができるのも強みです。同大学の特色ある教育方法としては、PBL（プログラム・ベースト・ラーニング）があります。これは医学部では一般的な教育方法で、まず症状を問題提起し、それに対する薬物治療の方針を考えることで問題解決能力を養う演習形式の授業です。

これに加えて医療薬学教育に重要な役割を果たすのが、2007年に三重大と結んだ大学間包括連携協定です。この協定により、両大学共同のシンポジウム開催や、講義・研究での教員の交流、三重大にない研究設備の導入による設備の充実・効率利用などが行われます。将来的には、両大学共同で大学院をつくることを目標としています。

▶ 宣伝より実習・研究設備を重視

一通りお話をうかがった後、キャンパスを案内していただきました。元のNTTの研修施設が立派な施設だったので、リニューアルでも遜色がありません。大学の方針として、建物や宣伝よりも設備に資金を投じているとのことでした。

講義棟4階には臨床薬学センターがあります。ここには模擬薬局、無菌実習室（クリーンルーム）、調剤実習室、医薬品の血中濃度を測定できるTDM測定実習室、模擬病棟などが用意され、様々な実習が行われます。

実習実験棟には、NMR（核磁気共鳴装置）2台があり、ESR（電子スピン共鳴装置）、X線結晶構造解析装置、動物用X線CT、プロテオーム解析用質量分析装置、ICP-MS（超高感度元素分析装置）、微弱化学発光（CL）、生体リアルタイム計測装置などの先端研究機器が既に設置され、一部も順次設置される予定です。国際的に著名な教授陣が着任するため、研究環境も充実しています。



■ 無菌製剤調整室（クリーンルーム）

▶ メディカルバレープロジェクトとの緊密な連携

鈴鹿医療科学大学薬学部は、県内で長年待望された学部であり、三重大・鈴鹿市の支援、三重大学、三重県薬事工業会、三重県薬剤師会との連携など、開設準備時からメディカルバレープロジェクトと良好な関係にあります。

6年制薬学部で必要な実務実習には、医療機関200名分、薬局120名分（60か所×2名）の枠を確保しています。薬局での実習については、三重大学・三重県薬剤師会の支援を受けて実施する予定です。

産業界との連携では、既に薬事工業会の企業の方々が薬学部の各研究室を訪れ、製品開発に関する相談や共同研究などが開始されているようです。学内にはインキュベータ2室があり、企業との共同研究にも対応できるようになっています。

メディカルバレーに今後期待することを伺うと、「基本的な交流はできているので、今後は企業誘致やインキュベーション、健康・医療・福祉の産業支援基地となる拠点をつくってほしい」というお答えが返ってきました。

同大学にはメディカルバレープロジェクトの中核的教育・研究機関として、優秀な医療系人材の育成、医薬産業の研究進展や統合医療を支える基盤づくりなど、医療・健康・福祉産業への支援に大きな役割を果たされることを期待したいと思います。

鈴鹿医療科学大学薬学部

〒513-8670 三重県鈴鹿市南玉垣町3500-3（白子キャンパス）
TEL: 059-340-0550 / FAX: 059-368-1271